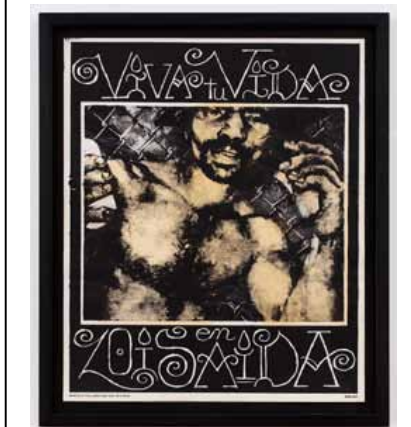
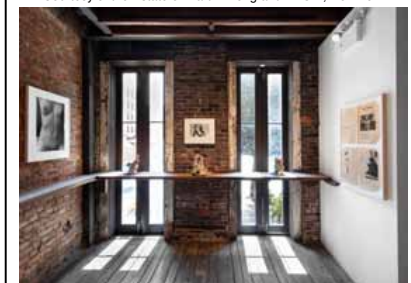


いまや大人気大混雑の観光スポット「ハライン」に、この夏、新しいアートが加わった。昔の高架鉄道の線路が枝分かれした部分(貨物列車がビル内に入るといった部分)が広々とした彫刻プラザに生まれ変わり、その第一弾として登場したのが、いまもっとも活躍する黒人女性作家シモン・リー(1967年生まれ)のブロンズ製の少女像だ。



Martin Wong, Viva tu Vida (Print for bullet - Your House is Mine), 1988
Courtesy of the Estate of Martin Wong and PPOW, New York



Installation View of A Look Back: 50 Years After Stonewall
Courtesy of the artists and Fort Gansevoort, New York

Simone Leigh:
Brick House
■2020年9月末まで
■会場: High Line Spur
W. 30th St. & 10th Ave.
■無料
■www.thehighline.org

**A Look Back:
50 Years After Stonewall**
■8月10日(土)まで
■会場: Fort Gansevoort
5 Ninth Ave.
■無料
■www.fortgansevoort.com

その作品は、エレベーターや薬を素材とする彫刻や身体を想起させるものが多い。今回のお下げ髪の少女像は、少女とはいえず、あまりに巨大。高さは5メートル近くあり、首から下の胴体部分にスカートかワンピースのように膨らんでいる。西アフリカに伝わる円錐形の住居やシンジビ州にある人気レストラン「ミの食器棚」(スカートの形をした外観)がベースにあざむく。

ハイラインの南の起点に目を移せば、ホイトニー美術館からは目と鼻の先、その名も「カンゼラ10番街の歩道がらゆくりと近づき、鉄橋の上を顔を出すそのお姿を目にした時、いつぞう心打たれぬものがあふれた。私たちの現実、アメリカの歴史、すべてを包み込む愛の姿である。

69年6月28日の未明、ビレッジのクリストファー通りのゲイバスタード・ストリートの「ストーンウォール」に私服警官を含む数人が強制捜査に踏み込み、客の若者や女装のダンサーらと衝突。乱闘は5日間にも及んだ。この事件がもとで、ゲイ解放運動が大々的に広がり、翌年からNY恒例のゲイ・パレードのバレードも始まっている。

実はこのタンハウス、80年代にビデオアーティストのネルン・サリバンが住み、89年に亡くなるまでドラッグクイーンのリボルや「ビレッジボイス」の名物ライター、マイケル・ムストラが訪れる賑やかなサロンだったという。3階には、そんな時代の映像が途切れなく流れ、サリバンのオマージュである油彩画や女装写真が展示されている。



Simone Leigh, Brick House, 2019
Photo by Timothy Schenck. Courtesy the High Line

半世紀でアメリカはどのように変化したのか… ハラインの少女像とグループ展

に大差はないものの、本展が特徴的なのは、スペース自体に懐かしさ、時代の面影が残っていることだ。ホテルやレストランに閉まれた酒落たミッドtownキング地区の中、ここだけは昔のままの間口の狭いタンハウスで、木のドアを開けた先には、カウンタートップが広がり、窓越しにオブジグが並ぶ。2階には、ジャズ・フジヤのポトレット写真や、人形作家グリア・ランクトンのピグレットのマネキン、足の「マニエール」の足、独特のレタリウオンによるポスターなどが登場。ハイラインは3階の展示場だろうか。

オプニングには、当時を知る人々を写真に撮られた仲間たちがいまやオジサン、オバサンの姿で現れ、アットホームな雰囲気。50周年といえば、国家の威信をかけた歴史的イベント、アポロ月面着陸を記念する展覧会も目立つが、同じ半世紀でどちらがどれほど進化したのか。ちょっと感慨深い幕開けもあった。(藤森愛実)